

## 2022年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名 井手 裕子	職名 助教	学位 修士(看護学) (大分大学 2006年)
----------	-------	-------------------------

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	慢性期看護学 看護教育 コロナ禍における看護学実習

研究課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・成人慢性期看護学実習における効果的な指導</li> <li>・コロナ禍における実習での学生のまなび</li> </ul>

担当授業科目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎看護学実習Ⅰ(前期)</li> <li>・成人看護学演習(前期)</li> <li>・成人慢性期看護学実習(後期)</li> <li>・看護学(栄養学科)(後期 ※2022年度開講なし)</li> </ul>

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【成人看護学演習】</p> <p>&lt;看護過程演習(全日程対面授業)&gt;</p> <p>今年度は、全日程対面での実施が可能であった。例年と同様、1グループ5人編成で、2人の教員で5グループ(25名)を担当した。今年度の3年生は、1, 2年次の講義が殆ど遠隔授業であったため、学生間のコミュニケーションが希薄であり、「知らない友人」が多い学年であった。従って、まずはメンバー間でのスムーズな話し合いができるように、グループワーク時に発言の少ない学生に意図的に声掛けを行うなどの交流を深めさせることにも注意を払った。</p> <p>事例は例年通り、慢性期事例(肝硬変)と急性期事例(胃癌)の2事例であり、事例ごとにもう一人の教員と担当を変えて全グループ把握に努め、演習前後で教員間で個々の学生への指導等について調整を図った。</p> <p>今年度、慢性期事例では、看護診断「非効果的健康管理」の教育計画(EP)を実際に実践することにしたため、計画立案時に、具体的な指導案や必要に応じて媒体の作成など、患者教育についての学びを深めさせた。</p> <p>&lt;技術演習(全日程対面授業)&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・患者教育の演習では、従来の糖尿病事例を用いた食事指導から上記の看護過程演習での肝硬変事例を用いた演習に変更した。肝硬変事例で挙げた看護診断「非効果的健康管理」の看護計画のなかの教育計画(EP)を実際に実践するという形式で行った。これにより、情報収集・アセスメント・看護問題の明確化・実施・評価という看護過程の展開を一つの事例を通じて学習でき、情報収集やアセスメントが実践に結びついていることを体感できていた。</li> <li>・血糖測定、インスリン自己注射の演習では従来通り1グループ5～6名の学生で行い、基本的な技術の取得を行った。ティーチングアシスタントとして4年生にも参加してもらい、低学年の技術指導を通して再度学びを深めさせた。</li> <li>・術直後の演習では、昨年度からの術後の清潔ケアの学習へ取りくみ、全体での演習後、1グループの学生達のデモンストレーションを実施、学びを共有させた。</li> </ul> <p>授業科目名【基礎看護学実習Ⅱ】</p> <p>コロナ禍のため、1年次の基礎看護学実習Ⅰは学内実習であったため、この実習からは初めての臨地実習になる学生達であった。まずは、臨地で抱く緊張を和らげるためシャドーイング実習から開始し、受け持ち患者</p>

とのコミュニケーション時には教員もしくは指導者の同席のもと、会話が運びやすいように場の環境を調整した。また実際の患者への看護技術の提供も初めてであるため、事前事後での学内での練習なども実施した。

実習記録に関するインシデント事象が発生した場面があり、インシデントレポートの指導を要する学生がいた。初めてこのようなレポートを作成するにあたり、決して「罰としての報告書」ではなく看護職としての倫理に基づき次回への医療事故発生予防の目的であることに視点を置いて指導した。

授業科目名【成人慢性期看護学実習】

- ・今年度より2年ぶりに臨地での実習が再開された。実習2施設のうち、A病院の実習時間は午前もしくは午後の3時間と限定されているため、その時間で効果的かつ有意義な実習ができるように常に臨地の実習指導者と調整を重ねた。
- ・今年度の3年生は、1、2年次の実習が殆どの学生が学内実習であり臨地での実習が初めてとなる学生が大半であった。そのため、臨床側に協力を依頼し実習開始2日間はシャドーイングを取り入れた。昨年度も1グループのみが臨地実習を実施できた際にもシャドーイングを行ったが、その際に早期に現場のスタッフとのコミュニケーションが図れるという利点も得られており、今年度も同様の実習効果が得られたと考える。
- ・臨地慣れしていない学生達の中には、実習記録の作成や臨地スタッフとの関りなど不慣れな環境に適応できずに、メンタルへ影響を及ぼす学生が多かった。そのような学生に、実習中に適宜声掛けを行い状況把握に努め、必要時担当アドバイザーに報告するなどしてサポートを継続した。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等 (任期)	加入時期
聖路加看護学会		1996年 4月～現在に至る
日本看護研究学会		1996年 6月～現在に至る
日本看護学教育学会		1998年 4月～現在に至る
日本看護診断学会		1998年 6月～現在に至る
日本糖尿病教育・看護学会		2003年 8月～現在に至る
日本看護科学学会		2008年 10月～現在に至る
日本慢性期看護学会		2017年 7月～現在に至る

2021 年 度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文) 新型コロナウイルス感染症流行化の看護学各論代替実習における看護学生の学に関する文献研究	共著	2023.3	西南女学院大学紀要 2023 Vol.27	①新型コロナウイルス感染症流行下における看護各論領域の代替実習で、看護学生がどのような学びを得たのかを探り、今後の実習指導における示唆を得る目的で文献研究を行った。 <b>学生は</b> 対象に応じた問題点や援助方法、更に多職種の役割や連携の重要性を学んでいた <b>が</b> 、実際の対象者との関わりをもつことができない代替実習では、感情の揺らぎを伴う学びは見受けられず、看護者としての援助的人間関係の構築

2021 年度 研 究 業 績 等 に 関 する 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
				とそれに伴う命の尊さや看護 観・人間性を育む経験を積むこ とには限界があることがわか った。今後、臨床現場と連携し、 リアリティや感情の揺らぎの ある実習方法を検討していく 必要がある。 ② 井手裕子、坂部滯、坂本未 穂、水原美地、橋本真弥、石井 奈央、安藤愛 ③ in press
(翻訳)				
(学会発表)				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(1) 共 同 研 究			
研 究 題 目	交付団体	研 究 者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
(2) 個 人 研 究			
研 究 題 目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備 考

社 会 に お け る 活 動 等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 期 間 等

学 内 に お け る 活 動 等 (役職、委員、学生支援など)

看護学科3年生アドバイザー(2022.4.1～2023.3.31)

看護学科物品係 (2022.4.1～2023.3.31)